

有明海水産資源回復技術確立事業*

ウミタケ養殖技術開発試験

大庭元気・野田進治

有明海水産資源回復技術確立事業において、ウミタケ養殖技術確立を目的として、種苗生産した稚貝を用いて試験を行ったので、その概要を報告する。

2022年5～6月の試験終了時に、生残個体を取り上げ、成長・生残結果を取りまとめる予定である。

方法

春季生産個体を用いた養殖試験は、当センターで2021年4月から種苗生産した稚貝(平均殻長5.5mm)を用いて、2021年5月26日に、太良町地先の干潟域で実施した(図1)。試験区は、散逸・食害防止のためカゴ区(アロン化成収穫カゴ:直径37cm×高さ28cm)に基質を入れたもの(図3)および囲い網区(縦2.0m×横2.0mに支柱として0.5m間隔で塩ビパイプを挿し、支柱の外周を目合い3mmのネットロンネットで囲ったもの)とした。種苗の収容個数はカゴ区では30個/区、囲い網区では1,000個/区、合計で4,480個とし、収容後は目合い1mmのネットで被覆した。

また、カゴ区では基質および放流方法を検討するため、基質をベントナイトまたは干潟の泥、放流方法をばらまきまたは手植えにて行い、合計4試験区を設定した。各試験区で、4例ずつ試験を行った。

秋季生産個体を用いた試験は、10月から開始した種苗生産が不調だったため、春季に生産し、陸上で継続飼育していた平均殻長29mmの種苗を用いて2022年1月6日から実施した。基質にベントナイトを用いたカゴ区に、稚貝を30個ずつ収容した区画を2例設けた。

結果

春季試験は、試験開始後に月1回程度の頻度で追跡調査を実施予定であったが、6、7月は天候不良および、気圧の低下による区画の非干出のため実施できなかった。また、2021年8月に起こった豪雨の影響で斃死が起き、8月末の調査では、生残した個体はカゴ区で1個体のみであったため、試験条件の評価ができなかった。

秋季試験は、試験開始から1か月後の調査時に、概ね半数の生残を確認し、平均殻長は31mmに成長していた。

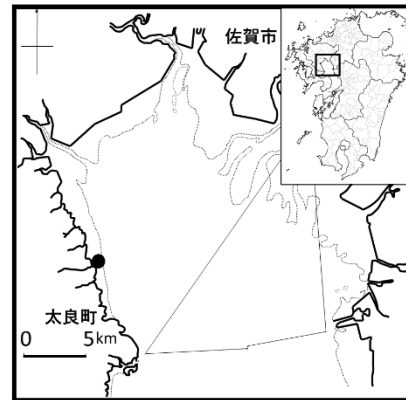


図1 放流地点



図2 カゴ区



図3 囲い網区